

子供と乗物

三角哲生

日本育英会理事長

Children and Vehicles

Tetsuo MISUMI

Director General, Japan Scholarship Foundation

子供は、生まれると、抱かれ、負われ、乳母車の御厄介になる。歩けるようになると、三輪車から補助輪付自転車、普通の自転車へと推移するのは昔と同じである。今は、三輪車の前後に歩行器と電池自動車加わっている。車輪付きの遊具には、他にローラースルー、ローラースケート、スケートボードなどがある。

駅の窓口が自動販売機に代わってからは、切符の要らない幼児のくせに、自分でお金を入れて1人前に切符を買わないと承知せず、それを集めるようになり、次いで、ミニカーを集めたくなる時期に入る。それから玩具のレーシングカー、メルクリンなどの鉄道模型を経て、ラジコンの自動車やモーターボートに至る。その間には、デパートの屋上や旅館などにあるシミュレーション式ドライブゲームに熱中する。より長ずれば、自転車も恰好良いプロ仕様のドロップハンドルが絶対に恋しくなり、あれは危険だ、いやそんなことはないと親と論争になる。数年後には、いよいよバイクに乗るぞとなって、深刻な対決状況が生じたりする。これらの全部またはかなりの部分を経て、最後に四輪にたどり着く。

子供が成長の過程で付き合う物事は、いろいろと沢山ある。上に記した各種の車の他にも、ラジカセ、楽器、タイプライター、電子キーボード、パソコン、竹の子族のような特殊な服装等々。これらの道具が、学校内外のグループ活動に参加する媒介となることが多いから、それぞれ意味があると言える。カメラとか、スキーとか、楽器などは、割と長く付き合うことになる物件であるが、子供の成長とともに自から不要となる物もあれば、ひと月かそこらで飽きたり、手に負えないことが解ったりして、押入に入ってしまう物も多い。

幼児期の憧れの対象に消防自動車がある。絵本の主役の一つである。ひと頃前には、ゴミ自動車もそうであった。ゴミ自動車の機能は見ていて面白いものなのだろう。幼稚園入園前の幼児は、徒然なるままに窓から首を出して“ゴミブーブー”が来るのを待ち構えるのである（このゴミ自動車のミニカーが製品とされたのは大分後になってからであった）。子供に身近な公共的サービスとして、小学校の教科書には、まず消防が出て、次に交通巡査が出ている。防犯や公安等の警察の働きは、子供の理解の発達段階を考え、もっと高学年で扱うことになっている。

交通に不可欠なことはルールであり、スポーツもルールを守らなければ意味がない（ペナルティを科される）ものであるから、子供の時からスポーツに親しませることが大事である。歩行にもルールやマナーがある。雑踏で人々の間を走り抜けて行くには、技術が必要である。背筋を伸ばして優雅に歩くことが望ましい。人との衝突は無論のこと、接触した時は失礼を詫言しなければならぬ。東京の都心は混雑度が異常のためであろう、歩行マナーの基準が世界中で最も低いと思われる。米国に行って最初に自然に会得する発音は謝りの言葉（Excuse me. I'm sorry. 等）と感謝の言葉のそれである。

乗物のルールと歩行のマナーには基本的に共通したものがあり、周囲に対する思いやりが最も大切である。この意味からも先頃当学会で実施された「二輪車を使った交通教育の実践モデル研究」は、非常に適切で建設的なプロジェクトである。実地に基づいて生み出されたこの成果が、各県の教育委員会で活用されることを期待している。

原稿受理 昭和59年10月15日